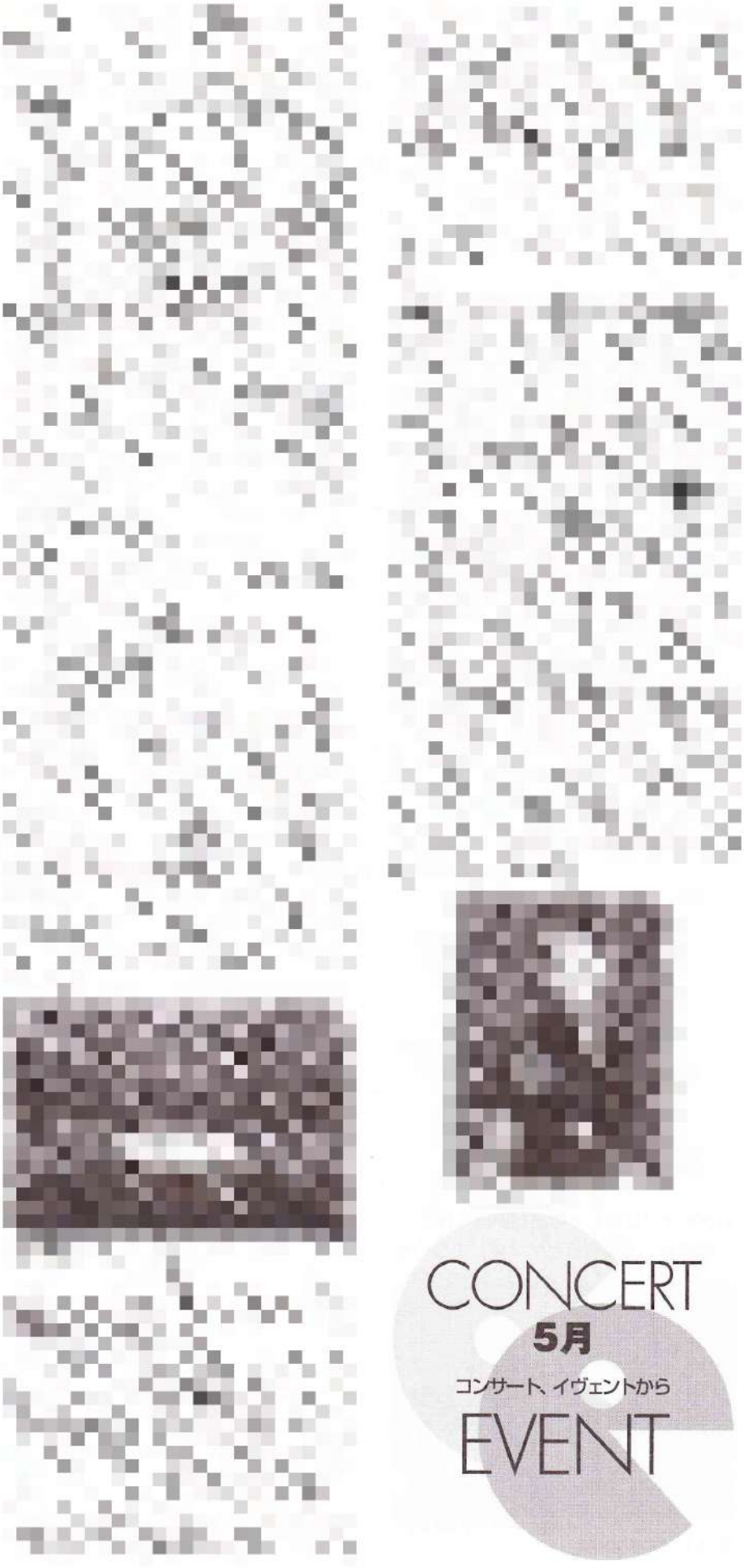

News シュルト指揮ミュンヘン室内管とオッテンザマーが共演

新首席指揮者に就任したクレメンス・シュルトが、ミュンヘン室内管弦楽団を振る今期最後の定期演奏会を5月11日に聴いた。今シーズンのテーマである「Reformation」(改革)はジャズの領域へも達しており、多彩なプログラムは挑戦的ですらあった。

アーロン・コープランド《アパラチアの春》冒頭では、律儀な指揮者のタクトが邪魔なくらい美しくたゆたうメロディが、速くなっても透明感は失わず、楽しそうに活気を帯びた後、美しいハーモニーを響かせながらピアニッシモで広がり消えていった。

一変してシェーンベルク《ナポレオン・ボナパルトへの頌歌》では、モーリッツ・エッゲルトが語りとピアノを担当し、現在も人類が直面している独裁者への憎しみを突きつけた。

休憩後は今年3月に来日したばかりのスティーヴ・ライヒ作曲の《トリプル・クァルテット》で、客演コンサートマスターに導かれた個々の団員の実力が光った。

最後はコープランドに戻り、彼がベニー・グッドマンのために書いたクラリネット協奏曲をスター・クラリネット奏者のアンドレアス・オッテンザマーが、ジャズのリズムでクラシカルに吹き、指揮者とジャズバンドのように呼吸を合わせたセッションを聴かせた。ガーシュウィン《ラプソディ・イン・ブルー》の出だしのように終わるこの曲のエンディングを生かし、アンコールにはガーシュウィン《サマータイム》で十分に歌った。

「ツアー直後で練習時間がギリギリでなければ、もっと上手なオーケストラだ」と語るシュルトの来シーズンが楽しみだ。

(中 東生)

心から楽しそうに音楽を共に奏でていたオッテンザマー(左)と首席指揮者シュルト ©中 東生